図書館だより　Vol.3　　2021 年 12 月

宝塚医療大学和歌山保健医療学部附属図書館

ごあいさつ

　師走を迎え、皆さんは忙しい日々を送っていると思います。
師走というのは旧暦月名で 12 月のことです。11 月は霜月、10 月は神無月といいますが、出雲地方では「神無月」ではなく「神在月」と呼ぶのをご存じですか？
　11 月（旧暦の 10 月）は、出雲大社で神在祭が行われます。全国の神様が出雲大社に集まって会議を開く＝「神在月」、出雲地区以外は神様不在＝「神無月」、というわけですね。
　ところで、私が子どもの頃はまだ旧暦のお正月をお祝いする習慣が残っており、12 月末と新年の 1 月末の 2 回、お餅をついて神棚にお供えしていました。現在の中国も新暦の元日はお祝いするのですが、次の日からは通常営業です。中国以外にも、アジアには旧暦の新年をお祝いする地域があります。特に中国の人々はそれぞれの故郷で新年をお祝いするため、1 月下旬は本格的な「民族大移動」となります。

附属図書館運営委員長　松尾　博史

推薦図書

ハトはなぜ首を振って歩くのか

著者：藤田　祐樹　　出版社名 ： 岩波書店　　ラベル番号：488.45F

「気がつけばハトはいつでもどこでも、首を振って歩いている。あの動きは何なのか。なぜ、一歩に一回なのか。なぜ、ハトは振るのにカモは振らないのか……？冗談のようで奥が深い首振りの謎に徹底的に迫る、世界初の首振り本、おなじみの鳥たちのほか、同じ二足歩行の恐竜やヒトまで登場させながら、生きものたちの動きの妙を心ゆくまで味わう。」（本の裏表紙から）
　私は公園を歩くときにいつも観察しながらもいつもイライラさせられることがあります。「ハトは歩くときに首振りが先か足を出すのが先か？」これは私が担当した理学療法学専攻 1 期生 1 年生後期の運動療法学概論の授業で出した課題レポートでもありましたよね。
　この本は、ライブ観察だけではわかりにくいハトの歩き方の分析とその理由を運動解剖学や生物学の研究にもとづいて、けれどとても面白く楽しい文章で解説してくれていますし、さらに他の鳥の歩行との違いも紹介してくれています。
　理学療法士や作業療法士が自分の目だけで動作を観察して分析することには限界があります。でもそれを測定機械や動画で分析する前に、まず自分の目でまずどこまで観察・分析できるかは、患者さんの辛さや大変さを共感できる臨床家になるためにもとても大切なことだと思います。
　巻末プロフィールに「人類学でヒトの歩行を研究するはずが、うっかりハトの歩行を研究してしまって以来、ハトはヒトに（名前が）最も近い鳥だと信じて研究を続ける。好きな言葉は『首振りと世界平和』、日本人が世界で最も首振りに詳しい国民になることを願っている。」というユーモアに溢れた藤田先生の著書を紹介します。

推薦者：岸本　眞

真贋の世界　美術裏面史　贋作の事件簿

著者：瀬木　慎一　　出版社名 ： 河出書房新社　　ラベル番号：706.7S

「本物とは」という問いについて考えてみましょう。
例えば絵画であれば、画家自身が描いた作品や画家と弟子によるギャラリー作品もあります。無名の時代であれば見向きもされなかった作品でも、一度世間で評価されるようになれば高額での取引が行われます。こうなると一攫千金狙いの輩によって「偽物」も流通することになります。すると、当然ながら本物と偽物の区別（真贋の区別）が必要になります。ではこの真贋とはどのようなものでしょうか。特にこの判別が難しい例を、この本の中から二つ挙げてみましょう。

他の芸術家による挑戦
著名な芸術作品を模写あるいはその技法を駆使して世に送りだされた作品であり、挑戦者のサインの有無が関係します。後者の場合は贋作も疑われますが、悪意というよりも偉大な芸術家への挑戦とみてよいでしょう。また、生涯偽物を描いて生活したという画家もいます。この本には出ていませんが、同年代のライバル画家の作品を購入して、その上に自作を描いたという例があります。下に隠された方が高価な絵画だったのですが、この場合はどちらも本物なのです。

作者自身による自作の否定
同一作者でも、描かれた時代により作風が変化するのは広く知られています。ある画家は、現在よりも過去の作品が評価されたことに納得できないということから、自身の作品を否定しました。その結果、所有者による訴訟にまで発展した例もあります。

「本物」とは何かという問いは、奥が深いのです。現在の科学技術を駆使すれば、制作された年代や使われた原料などから真贋の判定は可能です。さらに、ミクロな解析まで行うことで細かなタッチの違いまでも区別できるようになっていますが、超一流の鑑定家や研究者でさえ判定を誤ることはあります。つまり、真作と考えられてきたものが贋作とされ、贋作と思われていたものが真作と認定されるなど、時代の変遷により鑑定が覆ることも起こり得るのです。

この本は、「本物」とは何なのだろうと改めて考えてみる良い機会になると思います。

推薦者：松尾　博史